

編集後記

サイデンステッカー氏は、源氏物語が持っている世界的な小説としての特色は、四季折折の季節の移り変わりが物語の背景となっている点であるとのべている。例年にない厳しい寒さと豪雪でスターとした1981年も、春の花の便りが聞かれるこの頃である。このように移り変わる四季を愛でる心は、日本人の大きな特質の1つのように思われる。また、角田氏ら“日本人の脳”によれば、せせらぎの音や蟬の声を単なるノイズとして認知していないことが、日本人の脳の1つの特色であるらしい。

こんなことを考えていると、国際障害者年を迎えた今年の時点で、“日本らしい障害者へのアプローチ”“日本らしいリハビリテーションの技術や理念”があるのだろうかと思ふ。

このような気持ちで、この号を読んでいると、大変興味深いことがいくつも含まれている。まず、その第一点は、巻頭言の中村隆一氏の論文である。氏はリハビリテーションの技術に科学的根拠が乏しいことを前提として、運動障害を行為レベルまで取り込んで理論化することをのべている。日本人という行為者の行為レベルを体系化していくことが、

日本人のリハビリテーションに課せられた大きな課題であろう。

次に、特集は症例報告を含めて、筆者の方の御努力によって、重複障害の広汎な内容をカバーすることができた。中でも、篠田氏、村田氏の論文の対象である重症心身障害児のリハビリテーションに求められている最も大きなものは、働きかける側の人間のあり方のように思われる。このあり方の中に、“日本人”という特質をどのようにいかにし、どのように位置づけるかが、1つの研究課題ではないだろうか。

このようにみえてみると、間近に迫った新緑の候が待たれるのと同じに、リハビリテーションにおける日本人の技術や理論が新しい芽をふくのも間近のように思われる。日本の工業技術がその精度によって世界に名を成したのと同様に、日本人の心と日本人の技術で、日本のリハビリテーションを作りあげようではありませんか。

最後になってしまいましたが、充実した講座を作って頂いた先生方、多くの論文を投稿頂いた筆者の先生方に厚く御礼を申し上げます。

(大川 嗣雄)

次号予告(第9巻第4号)

特 集	リハビリテーション工学	
	まえがき	早大・理工学部 加藤 一郎
	移動用装具の概念	ベルグラード大 R. Tomović
	ソフトスーツの開発現況	ベルグラード大 Popović
	大腿義足	カルフォルニア・パークレ分校 Radcliffe
	LAPOC	労災義肢センター 青山 孝
	WIME ハンド：その機構とフィールド	
	テストについて	東京都補装具研 市川 洸
	重度身体障害者のための環境制御システム	神奈川リハセンター 島山卓朗・他
巻 頭 言	国際障害者年に思うこと	金沢大・医療短大部 立野勝彦
研究と報告	身体障害者更生相談所の心理判定の現状と問題点について	国立身障者リハセンター 岩坪奇子・他
	Locked-in 症候群の症例を通しての自助具的アプローチ	国立厚済療養所 清宮良昭・他
講 座	リハ医のためのリウマチ・膠原病入門	
	(4) 若年性関節リウマチ	杏林大・小児科 渡辺言夫
	活用すべきリハ関連諸制度	
	(4) 能力開発	労働省・職業安定局 河合諒二
	動作訓練法について (1) 動作訓練法と用語・訓練との関連	北九州総合療育センター 高松鶴吉
一 頁 講 座	リハにおけるコンピューターの応用	
	(4) プログラミング	労災義肢センター 土屋和夫
座 談 会	第8回物理医学およびリハビリテーション国際学会の印象	大川嗣雄・千野直一・(司会：上田 敏)
学 会 報 告	第15回九州リハビリテーション医学懇話会	鹿大霧島分院 新村 健
	第30回関東地方リハビリテーション医学懇話会	東大・リハ部 上田 敏

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
小 池 文 英
杉 山 尚
砂 原 茂 一
津 山 直 一
水野 祥太郎

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
千 野 直 一
土 屋 弘 吉
横 山 巖

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江口 壽榮夫
小 川 孟
荻 島 秀 男
小 野 啓 郎
加倉井 周一
河 邨 文一郎
小 島 蓉 子
五 味 重 春
斉 藤 正 也
笹 沼 澄 子
沢 村 誠 志
鈴 木 明 子
高 田 玲 子
武 智 秀 夫
田 中 照 子
土 屋 和 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
野 村 欽
橋 倉 一 裕
長谷川 恒雄
林 玉 子
福 井 園 彦
松 村 秩
三 島 博 信
渡 辺 英 夫
(五十音順)

(細田, 山田)